川崎賢子（清華大学日本研究センター客員研究員）

連載 30　成瀬巳喜男監督『生さぬ仲』　岡田嘉子の恋と越境

『生さぬ仲』（原作・柳川春葉）は 1912 年『大阪毎日新聞』に連載された。その後あいついで舞台化、映画化され、1949 年までに各社で十たびも製作されたというから驚きである。原作は継母と継子のすれ違い、その継母（であり嫁である）に対する姑のいじめなどがめんめんと描かれる家庭小説だった。

成瀬巳喜男監督の『生さぬ仲』（1932 年）は、岡田嘉子をハリウッド女優として成功をおさめ帰国した実母・珠江に設定した。娘・滋子（原作では息子・滋である）は継母・真砂子を実の親と信じ、慕っているが、姑の岸代は嫁を疎んじ、また珠江の財力に目が眩んで、滋子を珠江のもとに連れ出してしまう。真砂子の必死の捜索、そしていっこうに珠江に懐かず継母・真砂子を慕い続ける滋子の真情に、とうとう折れて、最後は莫大な財産をあたえ、珠江はアメリカに帰ってゆく。

生みの親より育ての親というメッセージは、非血縁主義の家族観である。はんめん、「母」の母たるゆえんは自分の野心のために離婚したりしないことであり、「母」の奔放さは許さない、という、メロドラマの倫理観だともいえる。真砂子あやうしという場面はあるものの、去ってゆく珠江の岡田嘉子の美貌とせつなさが印象に残る。

岡田嘉子は何代か前にさかのぼるとオランダ人の血が流れているとも伝えられ、自身、越境者としてモスクワの地に人生を閉じた。モダンな美貌で鳴らしただけではなく、妍を競う同時代の女優たちのあいだでも「岡田嘉子嬢が矢張、一番に色々と複雑な気持ちを出してくれた」（内田岐三雄「主要日本映画批評」『彼を繞る五人の女』について、『キネマ旬報』1927 年 4 月 21 日）、「岡田嘉子は腹芸を示さうとしてゐる。やはり一番の出来であらう」（北川冬彦「主要日本映画批評」『東京の女』について、『キネマ旬報』1933 年 2 月 21 日）などと書かれたように、演技力と内面性においても評価されていた。

『岡田嘉子 ── 悔いなき命を』日本図書センター、1999 年

『キネマ旬報』（1927 年 4 月 1 日号）に掲載された『椿姫』の広告

彼女は恋多き女だった。映画『椿姫』（1927 年）撮影時には相手役・竹内良一と駆け落ち事件を起こして、日活を解雇されている。

その彼女が、演出家の杉本良吉と樺太で国境を越えて、ソビエト領に入ったのは、1938 年 1 月 3 日のことだった。杉本が所属した新協劇団は声明を出して杉本を除名し、社会に詫び、劇団とは何の関係もないと発表した。これに対して、岡田が所属した井上正夫一座は「嘉子は思想的には何の関係もない」ので、処分無用と断言した。

恋の逃避行と呼ばれたり、国内で思想を弾圧された左翼演出家の杉本が、嘉子を道連れにした、あるいは擬装のために利用したといわれたこともある。

ところが、二人が危険を冒し、亡命の夢をみたソ連は、彼女たちをスパイとみなした。彼らを待ち構えていたのは、拷問と脅迫と苛酷な取り調べだった。偽り

の自白が引き出され、杉本は銃殺刑に処された。岡田嘉子を待ち受けていたのは収容所列島のラーゲリだった。戦後生存が確認され、一時帰国した岡田嘉子は、熱烈にソビエトへの越境を求めたのは、杉本ではなく、自分だったと書き残している。彼女がいのちながらえることができたのは、なんらかの対日工作などのインテリジェンス（情報戦）に登用されたからではないかとの見方もあり、ソ連時代の経歴についての彼女自身の証言には疑問が投げかけられてもいる。謎は深い。